千羽鶴

絵と文　金子　静枝

八月の広島、長崎には日本中から千羽鶴が届けられます。

広島の原爆の子の像は折り鶴を捧げて立ち、折り鶴の碑とも呼ばれて、平和祈念の千羽鶴が捧げられています。この碑は昭和二十九年に、少女が白血病で亡くなったことから、全国の子供たちが平和を願って基金を集めて造りました。

色とりどりの千代紙で丁寧に一羽ずつ折られた千羽鶴の氾濫はすさまじく、声なき声となって、庶民の平和の祈りが迫ってきます。【連合】

自然食で……献血80回以上も

重ねて表彰を受けた岩下さん

感謝状を手に岩下さん

献血八十回以上で日本赤十字社から表彰を受け、感謝状と功労章の伝達式が七月三十一日熊本県庁で催され、三分会の岩下武文さん＝荒尾市大島社宅二十三棟、四十六歳＝が細川知事から表彰されました。

岩下さんは、十八年間にわたって八十六回の献血をされていますが、びっくりするような回数の献血をされる主な理由は、「献血の際に機械的に血液を分析し、いろんなデータが示されるので、自分の健康状態を知ることができる」。さらに「献血する二～三日前には体調を整えるので、自分の健康のためでもあり、ひいては家庭のためにもなる」と言われる。

岩下さんは二十数年前まで病弱で、入・退院を繰り返されたそうだが、その後は自分の健康管理について考えた末、食生活の改善と体力づくりに取り組み、そのころから献血をはじめました。また、十二年ぐらい前からは、自然食（玄米と菜食を中心とする食生活）を始められたとのことです。

このようなことが毎年五回も献血するという岩下さんの体を支える保障となっているようです。

岩下さんの自然食は、森下敬一博士の自然医学の指導によるもので、これについては、すでに二年前に『みいけ』の〝なかま〟欄で紹介しましたので知っている人も多いと思います。

岩下さんは、一日一食ないし二食を続けながら（仕事に弁当は持って行かない）献血を続けてこられたが、この十数年間、歯医者以外はかかったことがないそうです。

岩下さんは「十六歳から献血ができるので、多くの人が献血をされたらよいのだが」と言っておられます。

また岩下さんは、すでに昭和五十三年十月、日本赤十字社から金色特別社員章と感謝状（献血五十回）を福岡県知事を通じて受章されており、現在、自然医学会会員、フードコンサルタント（食養士）、物理療法術士として、三交替電気工をしながらの忙しい毎日です。健康のために居合道は六段錬士の腕前です。

家族は奥さんの澄子さん（四十二歳）、高三の娘さん、高専一年の長男、小六の二男の五人ぐらしです。

体のことで悩んでおられる方や、自然食や健康法などに興味のある方は、一度相談されたらいかがでしょう。

三池主婦会 定期総会

とき　八月二十六日（日）午前九時三十分
ところ　労働金庫大牟田支店二階ホール

会員さんを見舞って

四山ブロック　藤田　美代子

雨の日、組織部長の中原さんとK病院へ、主婦会員のTさんとOさんを見舞いました。

ポチャポチャとかわいいTさんは、少しはスマートになっていられるかと期待しながら行ったのですが、全然変わりもなく、いつものように明るく笑って話してくださいました。それでも、手術のショックで何度も死にたいといってご主人を困らせたそうです。

頼りのおばあちゃんも入院されて、ご主人も孤軍奮闘して出勤されているとのことで、「きれいずきの主人だから、家の中もきちんとやってくれてると思うけど、毎晩電話かけてるのよ」とやはり自分のことより、息子さんやご主人のことが気になる様子でした。

次にOさんを見舞いました。こちらも息子さん二人とご主人の男ばかりで留守をまもっていられるとのことで、病気のこと、家のこと、となど、どんなにかつらい思いで闘病生活を送っていられるかと思うと、胸のふさがる思いでした。

主婦会員も、最近病に倒れる人が多くなったように思います。

三池闘争後、三井の差別と低賃金政策で共働きをしなければ生活が出来なくなり、自分の健康を考えるゆとりもなく、内職やパートなどの劣悪な条件の中でクタクタになりながら働き続けてきた結果ではないでしょうか。

今春闘も二・四七%、一八二円という超低額に抑えこまれ、通勤電車の廃止、宮内社宅の強制立ち退き、天領病院の基準看護導入による労働強化、社宅浴場の廃止など、次つぎと労働者無視の合理化が出されており、生命や健康、生活を守るため、家族ぐるみの闘いがますます重要になっています。

幸い、お二人とも退院も間近いとのことで、元気な姿を見せて下さる日も遠くないと思います。

一日も早いご快復を祈りながら、健康の大切さをしみじみ感じた一日でした。

お便り

万感胸に……

埼玉　隈元　よし子

前略　本日（八日）小包届きました。思いがけない送りものにちょっと驚きましたけど、貴女のお心のうちがすぐ分かり、ほんとうに嬉しゅうございました。

日頃はごぶさたばかりの私を気にかけてくださって何よりの貴重なものをお贈り下され、なんともお礼の申しようもありません。鉢巻の主婦の顔、赤旗、そのバックのつるつるした白い表紙をなでながら、万感胸にせまりました。

今まだほんの十頁ほど。ゆっくり時間をかけて読みます。当時のことは、この年になると夢のようです。

おこがましくも会長などと先走って何の役に立ったのかと、「めくら蛇におじず」の例え、まったく汗顔の思いです。

でも私にしてみれば、満州時代の青春と同じように私の生涯のうちの第二のドキュメントのような気が致します。（中略）

手記の感想は後日必ずお送りします。

×　×

隈元さんは埼玉県入間郡鶴ケ島藤金仲丸一九二の六七にお住いで、CO家族の会二代目会長をつとめられました。お手紙は清水さんに宛てた長文のもので、ほんの一部のご紹介です。なお、短歌がたくさん添えられていました。いずれご紹介させていただきます。ありがとうございました。

七つのまちがい（三面）

〔解答〕　左のビルの窓、柳の枝、山の雲、中央の足、横幕の「ク」の字、手前の山、旗の先。

園芸随想

珍しい春ラン

十四分会　田上　勇

植え込んでから十年にもなるだろうか。庭の片隅でひっそり咲いていた春ランが去年の春、こがね色の新芽を一芽出した。

〝これは珍しいぞ〟と内心ほくそ笑んだ。

折よく白川公民館でエビネ展があり、専門の人に聞いてみた。「なかなか見つからぬ珍しいものです。大切にしなさい」と言われ、植え方まで丁寧に教えてもらった。ところが十月になってしだいに萎れてしまい、がっかりした。

そして今春、何気なく見ると今度は、やはりこがね色の花芽が二芽出ていた。〝これはしめた〟と思い毎日の管理が楽しみになる。二芽のうち一茎は元気よく伸び、一茎は伸びが悪く、そのうちしぼんでしまった。

一茎の花は見事に咲き、話を伝え聞いたある新聞社が写真を入れて記事にした。

マスコミの偉力におどろいた。電話がかかり、来宅する人もいる。荒尾の人は、在宅の日？などの問い合わせがある。そして三日目の夜、近くの春ラン専門に取り組んでおられる方二人が来宅され、専門書を片手にいろいろとお教えてもらった。

話によると、このような花は九州で珍しく、天草と背振で出たぐらいで、ほとんどが東北地方で採れているとのこと。「高価なものは例えば、某印刷会社の社長は一芽一千万円の品を買われましたよ」と言われる。雑草並みに思っていたのに、そんな高価な種類なんてと、その気になれずにいると、「本当ですよ、本当ですよ」と、その気にさせられる。

ほかに二鉢あり、それも十二茎、六茎と花が咲いており、それも白覆輪の珍品とわかる。

用土や鉢が悪く、植え替えてあげると言われ、植え替えてもらった。その上珍しいスミレをもらい、もう一人の方からはエビネ八種を頂戴した。狭い置き場に、うれしい悲鳴。雑草から一気に位上がりした春ラン。頂戴したエビネとともに大切にしている今日この頃である。

田上さん宅の庭で咲いた珍しい黄金色の春ラン（原版はカラー）